



俳諧一串抄

坤

中村俊定文庫

文庫 18

827

2







俳諧一串抄卷之下

○題詠の部

さびといふ如く。持統の詠も物言を述ぶるの實用あり。物言ハ季節の詠物りく論じべきあり。由志よまづ詠物のおと小舎あつと序と礼一重なきあり。詠は詠物の梅柳と賞詠する為の句とせハ。拙藝一編は落るん。拙くく次おん。その境界不意なる種若或ハ名所木の題より。就く。そ具合試と実用の備とあらべきあり。

俳諧一串抄

三二





故小今勢海とさ記ふかくりのこ

一とせよ一夜つまらざるかうか

古畑や昔はくゆく男ととを

あんまやくたにふ六賣うのあまや

齋まらなハりののみのかちあるとこさ記といふるがま

これ一葉一夜の夜日あるを示しつらなる。古畑

の句も古典のれあるを喻しつらなる。才この句ハ

白ひるに微菜たのり新妻の病ふ養するを。

室中の食物りくく喻しつらなる。

梅とさとの梅や新波の二年越

あれ箱二とせがうらうら古郷へゆきける時の句

あるべし。新波ハ二年越といをん料あり。これ

和爾わにが新波の大雪と雪やとる状ふ。冬あがり

今をまきと二とせふうけたる群りといふなり。

古郷ハあふををきつらなる。大坂を指すハゆらば。

梅うまよの門と日の出るは梅や

の句と。はくと共お借候うと。おのづのり後急

あり。の門とハぼんのつらなる。梅花の日光にこそ



それ。おんのりと薫りを發するを纏かたせいでるや  
あり。日影のこの門と出るとせむを梅まふ何や  
あうるべし。詩小傳く思ひ淑氣催黄鳥うぐく。  
日光ハ淑氣。梅ハ黄鳥あり。山路ハ香威のある  
所ハ儲たくわくものこ。

かぞへ奉ぬ面影くの梅柳

これ都大橋のむあるべし。長閑ふりて後不  
樓閣あるを梅柳りく形容しくあるを。其  
梅柳のむありとせば。くらの若く所あり。

まもやけしきくらのふ月と梅

花事色のむく。月梅は佐の辨ちれば。いづ道の終くを  
とむむべし。むのこは月のこちるふらこのこは。数珠  
示せり。は佐のこ物とせむ。むある。つを諭すのこ。

梅柳こしてさる光うるま女の那

これハ梅柳のむく。如ハむもあこよむべし。

まゆりしおやはさるる。哀々猫の書

これ傾うるむむなり。たのふおをつる。哀々  
ゆるべきを器し。くあるべし。



鶴下りて七日あはる帯う那

花咲く七日鶴あはるあのとてうな

られ二句はよ集は申しり。初句は花見七日の句  
もく。これぞ箱の表と裏あるべき。次の句を箱  
の西ありとす。花ハ初句を鶴う花あはるとす。  
がた。鶴一とひ下れたを代は七日恒とす。なれ  
を。鶴ハ七句といもん料の序に。此体裁名所乃  
那天の鶴之の句もあはる。あはるの句を二句とせば  
花の顔ハいふとせま。

むの雲霞ハ上野の浅草一の

これむ曇れ句あるべし。花のやハ正下花  
指縁とむ鐘秋とす。所か。さしは端の報  
魚ぐ。んが。か。さ。は。華。若。雲。の。よ。か。あ。る。日。の。字  
どのと撰れ。ま。か。ん。花。曇。は。ま。か。ん。花。曇。は。ま。  
若。あ。の。の。言。方。の。言。を。あ。ら。わ。て。何。の。さ。ひ。づ。く。ふ。  
やらん入おののふ花やあま。ん。あ。ま。じ。し。こ。ん。な  
う。で。い。き。慈。悲。の。鐘。を。秋。枕。同。し。つ。も。り。ん。樂。天。  
が。得。も。あ。り。ひ。ゆ。ら。



むの陰福平 ぬる 後 あり  
これ俳句の姿をそとせり。うゝむいハおぬり。

種消て花の姿を けく 夕うね

これ種を捨てきりの。姿をそとせり。消る平  
宿ありとおとせたる。体裁なり。鼻と擗く  
姿の貴語なり。句のうゝむいハ日ハ腕入おぬり。  
むの姿を種消てけくあり。

木のりたけ汁も 給も 梅のり

この汁の中を梅朝梅湯苔ありとありを。うゝ

花は種しそとれいそぬがそいふあり。

種なる 奴花見るハ種が種れさぬ

これ花は貴観ハ種しそとる句ありん。種とゆゑ  
種とあるふゆれとさうせハ奴の句となさふ種  
あり。そこのおと貴するれゆあり。種も奴もいふ  
らふ種とる種とすするも種種なれむ。さう  
ゆゑ種と種とありん。古今集の序あり  
是れが種と種とありん。種と種とありん。さう  
うゝむいあり。



一ひしこやむのやこりれ<sup>つ</sup>の核木  
 せや人やむのその智之十里  
 一ひしこやむのやこりれ<sup>つ</sup>人參  
 この二句むよとて美人と云ふ也。やこりれ病を治す  
 らるるをいふ事也。むのやこりれを論し  
 一ひし初句ふゆまゆ一ひし著しとて終り賢  
 者のそしめを論しとて一ひし初句。次の句ハ  
 魏の曹操とて一人。曹操、碑とよむ。揚脩ハ  
 かくれたる事とて道之十里あり。故事ゆり。とて

れを世やハ古平の時代と云ふ。人やハ人の情状と  
 一ひし此句の智者ハ古の句ハ賢者と云ふ。共ニ  
 一ひし一ひしとてわけ。むの貴すむきを論し  
 一ひし  
 花のまもむり一ひしの白茶うね  
 後河路やむ橋も茶のうねひ  
 一ひしや字活の糖糖のうねひ  
 初二句ハ茶れ白牙二ハ山吹の白なり  
 橙や伊勢の白子の店と云ふ



この句神宮れちて神樂とりちてせらるるなり。  
神樂無形ハ茶室より二月を登りて  
杯生の末とちれた江戸傳中れ注をもあつ  
とあるとを。辨りてちて店さうじりて論  
とせ

ハ 蕪まゝに來る芽法柳やと

蕪蕪の句なり。表ハ花ゆく蕪の柳の本  
まゝに來るハゆきゆくまゝにまゝに  
裏のころはハ花ゆき——蕪又まゝにまゝにあり。

芽法の字よりて蕪——まゝを論——なり。これカ  
句と賞するものれど。只愛体裁と名づく  
ゆききた。後ハ句れちてハ海は出せる早苗  
等れちのおと。す——とやま——ふ意味あり  
とてそのふり也

ふたぢちのせを夕風やとるお苗が  
生きたちのつらむらふおちる生海流が  
本流まゝに茶室もはやおちるま  
あつや糧海ふ道なりといふ



初句の早苗ハ極波〜する戸風はなや靡  
 とのづく。生長のやま此富州なるを喻せり。  
 夕の字ふ力あり。生海流ハを場合あり〜あり  
 おりて。飛のあどり此を喻と。一の字あ力あり。郭  
 といふなき山勢は公どの〜せり。初夢の貴あり  
 と喻〜。新州の句ハ剛柔を合せの格〜  
 かく筆とる例は名人おろ〜。大はれ中おろの  
 系の新州ハ名〜もかたぬ物〜を有ら〜とた  
 ちむれよ〜れて。この極書が早業ハハ志う〜と

笑をせ〜りあるは

甚の月所油より出〜赤坂や

られ東海道は稀ある十六丁れは法ぎの〜  
 種疾と喻〜赤とつけは働〜せ且流〜のや  
 小歎と合あり〜

一夢れ江小橋〜ふや郭 公

郭 公夢橋〜ふやあは〜

中〜きん消り〜やあひ〜

此を〜れ二句も集中並ひ出〜。新ハ流の句



せうにみ定られし世傳ありとぞいと怪しくし。  
 初句ハ名も不掛合せしるはなれを必而ぬる  
 と不比する名地ありん句定ハ流石のあり業も  
 此一夢も不奪ひられしとく奪ふの名を横しふ  
 の一云不舎りく。世態のりし如あり。初句も  
 貴名のあるりく。あふ貴院を付れた。郭公英  
 夢を喻ふ物あり。さるるもあつらひる  
 どうしとせた。水鏡とく。鴨とくものかたるる  
 ありしと。格も波とべし。且江とありとられたの

けうく大小有るく一の字ハ大の掛合せあり。果  
 の句も其對を撰べし。鴨とくものかたるる  
 浪跡う竹生傳う。世大物りく。郭公を喻し  
 ころなるし。

橋や川の世中の郭公

此れ橋の句なり。時考れ初とてさへうは。句定  
 郭公り初をさの義。川の世中の古を集  
 日といふくの世中れ清ありとみし。世中へ  
 此二ワの程をきいふし。むしとあふ橋



の秋を喻〜〜〜。郭公の句あり  
とせむ燈中不用あり。句意もあはれ〜

おと宿はさうぐめ終るやまのつやど

此句集中喜花の秋よんゆきど。牡丹れりあり  
な〜。これ菊が帯れ才核あり。

夏の秋や崩るめ〜冷〜物

蓮の葉や夕魚てせ〜る合羽

初句中のての字濁音あり。後の句林孝之  
盡る精靈むくの句あり〜。

ころる暑〜吹や一樹の松の青

これ夏不涼〜き松風を暑氣は精〜る

妙あり。一本ぐ〜の涼風の暑氣も奪を道。

却〜空風とあるなり〜。天地間ふ〜る

大暑を喻〜。

み月や六日もたの秋よの如し

禰ふの樹の葉越もいと〜星の秋

七夕や枝と空あるそ〜の秋

凡句と並〜吟する不必序破意ありとをば



之句初ハ近増る思を述へ中々あさうぬ  
類りを極む後々秋の体きとかけく星の  
糸と控し〜り

目あかする時や志げ〜の酒り香

喜秋の梅り易れと歎〜る句なり。際り  
約目秋の香を〜れき極む思よせ。山路俤里  
〜喜るの。間もなく又後里来〜るなり。  
さて句を傳る不体と用との分り。体と不体も  
せよ月よもせよ。其物の縁を〜傳よいひるる

なり。用と不体物の体あ〜いひるる事あり。  
あさと中秋の月か影〜あさを。九月の物こ  
るや。時に金生水夜に雲霜〜空あを暑乃  
標あり。天漣を〜波〜る。皎〜  
〜る。浮よゆ〜。洗むあ〜。通平際  
あり。そつたにあり〜。その海形あり〜  
物あり。このみ秋と古人の句に〜名月を拂〜  
あり〜茶碗うら〜これ体の句〜。被れど  
茶碗もや〜。天と月とお水



俳諧一冊抄  
自註一冊抄

世四

くさくさをと喻し〜。まて用のむい

名月や花う〜ん〜く棉 島

名月や鶴のまぎ〜を二行

是ハ月を空にまぎ〜其光をを喻し〜る用乃  
白なり。抛きとも俳諧の本意ハらぬ〜も  
いとゞ。体も用も向ふ不存をき或ハ行欲不吐け  
る〜。と傍と句不絶〜きあり。其南が本母  
存不絶の存あり〜の月と吐せ〜も。只秋會  
の時の〜をりあり。種く人〜とい〜る會合

もろ〜き此良秋と思をせ〜り。

雲折〜人を中よむ月名〜の秋

名月や兎ごら〜不登の椽

庭取の〜人ふん〜月名

名月や我世も更むいつ〜

名月や我と等祭の因うら 西

名月や沈とめ〜〜秋の月元

蝶子のま〜ぬ花り〜秋の月

良秋のやい〜有〜も大体は〜〜。初白ハ

俳諧一冊抄

三二



休むとゆげく。休手ぬ程の月不ゆれざり紙  
 諭し。汝あるも表ハ思ふちたふ不月と疑をせ。  
 兎ハ必至にはく付なれを。裏の如く裏より方  
 貴客此集ひゆるとおもせしなり。を次曰白ハ  
 月不周く疑ししをなす。汝の如く疑く人ハ紙  
 しく金く月と探しせしなり。それかのかく休利  
 の心面ともぐし傍と遊ぶく月と諭す汝者  
 とん。それを傍とゆぐく白を探る不疑くを。  
 必その分ゆらん。古歌木の傍と白をせし。金とを

探しとむるはりしよりの事あり。穉の一ニ  
 此れをともく。その如く金と白をば。或ハを穉  
 の心面きの届くづるとを。是ハ何集の秋の夜。是  
 ハ被禱あり。探りまじり。汝ハ此者のをを失  
 かも必ゆらん。

稲妻や雨みのこゆくお位の手す

お位ハ晴るるく稲光を救ふるをなす。今借て  
 稲妻と諭ししなり。雨ハ光りた後る場紙より  
 け。在るハ晴るの落若穉よりく白を六収たり。穉ハ



或人私くさていそく世よ句こ不秘傳ひひなり。い句伊勢物  
傳つたへざし川の阪の傳つたなり。稲妻の光且かつたを  
秋の雷なり。六位ろくゐを左ひだり中納言ちゆうなごんを推おしし。書  
ハ屏びんふ二條の后ごうなりといふ。されいある方かたよりの  
傳つたぞ。かそくくハ好このむ家いへの夢。

行ゆ秋あきやも秋あきむけむけなる粟あはれい

引ひ秋あきや男おとこハ女めづのぬりのなれが

初はつ句こ秋あきのななりあもこれままぐぐなり。今いまハ  
秋あきもああるると歎なげくく。世よハ詩うた經つらなる秋

思おも悲かな春はる女むすめ愁なげとありふかりひひうせせなるなり。句  
意いハ世よ夕ゆふ當あれ佳よき世よより外ほかの事ことありと  
いふべきを。たちまち及およびびしとささが男おとこなれ  
む泣なみずと他ほかの詩うたの悲かなと今いま一ひと篇へん踏ふ登のぼれ  
る翁おきなが古ふる侍さむらい古ふる歌うたを取とりり世よ極ごくなるた句  
ををくくののややりすれを。古人こじんの糟さけ物ものをかむるの  
説せつををいいふふこと必かならずずあるるかかねねどど既すでにに心こころ  
ううのの一ひと家いへををあるるかかねねくく。いいふふこととるる卑ひ劣りゃく乃すなはち  
ああるる侍さむらい歌うたの人ひとか。穉ちハ古ふるきき残のこ



慕ひ心八部しきを引ひんと形ふよりの如也。

落おち目れまゝの茶中うね

茶巾の落茶の縁終なりなる縁終を如先中より  
煙よりあるもさるる子をなれとられきてははくぬ白とある  
りの多く歎悔ももるの如を伴ふるもを扶あり

風や顔もれつゝむ人のなき

骨柴やそれとるるより蝶の壳

初句時前此病ひと解ぶ例の徒云あり。おの  
顔もれやそのだみくるなきりく風の樹木平

吟をさけぶ体きを諭し〜たるたう異な  
ふ。脚の白人の魚と出せるハ非なるべし。後世の  
おの松風の吹海りたり人の魚と何るハ松風  
無〜む人。その歌色おの〜たるるをりく。松風  
の音あり〜。其強〜りのふを〜きを諭し  
〜るたう〜こがし松風おの〜虚家のりのあつ  
ら。物態強形者す〜のけぢめおのづ〜新有  
べきあり。骨柴れ白中七文字空老迅速と勸  
め〜感あり。



俳諧一書抄  
俳諧一書抄  
三三

ぬり賣れ厨のれあり夷博  
夷博能賣りり博忘せふり

初めのころり後序のめづりありし由。今六季  
ありて末編のつづりふ鳴ありくとあり賣と  
名づけて。今日ハ海物の鮮<sup>たつとさ</sup>と賣脱<sup>たつとさ</sup>とを論  
しとせり。死序のころり高人の振賣とせば。  
ゆえれとゆゑ慨言働うべ。さうとも振賣と  
ありといふ。いしゆゑ泥実病うとも風流も亦何  
あらん。次のもある。能うり此博也。海物と賣と

る修業紙のしをせり

掛とりふ意のしをりてせたりや

かけ巻の冬季のころりや。元四季ふゆりりの年  
の終りをとる。これ季の大方のたよりある  
べし。さて風雅の花ハかゝる類せりふありん。  
一息せば人もふありし博りののゝ意もふ  
れよりぞある

年あるとや海士れゆゑこれ俳諧集

これ種くも味あり

俳諧一書抄



伴譜一申抄

三

これこれ字菜めし不揃ん年一の書  
は日とこれ流るる年れ流なるむ  
これたふ年忘の句なる。打碎きくる体裁な  
ぐ。句忘の字明なるハ格の正しきう後之。後の  
句流ハ忘の字と論しる

傍の舌不骨なるし一死なるひ

佛舌無骨の方便なるハ固うう解が知る所之。  
今の世除穢の門立せる本菜強者の。うその  
そなる呪文と解る。むそくた上篇の賣<sup>賣</sup>徒<sup>徒</sup>哉

此道とるなるん。さくく解うを世明磨くう元  
祿のあひぐ九回十多弱。その志くべ画一なるん。  
集中混し一なるし。うあ後もまこと知る事  
絶し。今ここれむと挙く只その志くべ乃  
帰する妙法なるものこ。

あはれものなるものか。さくく教とけ  
針さや。肩は拙打度ありもの  
そくくか。拂子や。智恵れ去用下  
時をさや。むか。かりく松の書

伴譜一申抄

三



伊勢一書抄  
伊勢一書抄

八五

しつれりや亦れ帆つるふね付く  
魚をこれんちあきくま年とよまれ  
新のまよよしつる牛をうな  
合扇の松の古さや冬ありを  
うふ斗ふ人も年よれ初しつれ

○境界の部

にほよと一風を搦くころ無はる境界よりく。  
隠者桑つよハ断つねど。箱が動靜そのけら  
なれた。信は致あく只境界とつふのこ。これを  
條下の由此境界と立定るさくへきあり

殺むゆりそむ紙紙書る危の毒  
蓬葉ふつそむ伊勢の初たより  
りは一ツ瓢ハかりそむ我身う那

初む殺ゆりとる危中一物もあはれを糸は。そむ紙

非昔一書抄

八五



概きくみづう〜隠者たる事と宿業を  
 世人の逆さまお前〜ころあり。中のわれも  
 ろの蓬菜菜はい〜も。松竹は業をえと後し。  
 新恋ふ齡をかりん。境界のものありねを。〜逆  
 事のあら〜とせんいあるはふ仰く神代いせ  
 のたよりは〜あり。後なる物一ツハ〜ありあ  
 ちの愛のあり。世業〜のひびくを〜  
 ころあり。これらの句境界と歌とせよと。句  
 意〜を〜。

似合〜や新季瓢米ぬ井

か〜とぬそ宿の菜汁は産う〜し

初句似あ〜やあり。これを境界の句七十斗  
 あり。葉中身と〜ひ我といつる句ハ大新  
 境界の句と初〜。

風君う摺〜る正月小袖をきと

誰中〜が姿は似〜りけさのまを

世のたれの字〜人あり〜。英波境界〜  
 似字方のま〜と者〜。みづ〜〜。



道元禪師。被命至永平寺に任じし事。  
 後醍醐院より。常衣禪室を命じし事。禪室  
 事。終をば。生涯が事。不空ふせしとぞ。其  
 偈よ。永平雖山淺。勅命重々々。却被笑猿鶴。  
 紫衣一老翁。この偈のあらはしむる事。  
 為さるる事。此山の勢や猿が勢り笑さん。  
 今の句畧也。

記ふく我友ふせんぬる小隊

これ境界の海のこゝろに。まゝとふむすけん

あまきと懐のこゝろなり

心と門松くじろふ負ぬ更衣

古何をせ物人の松よまろしや

夏夜いよと風とよりおろしと

二句せふ旅中の更衣也。初句ハ一僕もあまきを  
 諭せり。次の句ハ中仙なる熊坂長範が名跡の松  
 ありん。句意ハ清よつふ衣の温とせのたつた。  
 我聲夜の人目ふまろしきを松ふうけたる也。  
 松の思はんもやろしきのあまきをたつて



あゝこの句ハ世俗のそなれしきと歎くべし。昔の阮咸が擗鼻禪と云はく未免俗とのひしけりん。

人は米を嘗うかき

よの中ハ稲うる比や字の危

閑閑祝

初うはるや登ハ程おら比門の極

本はきしは程おらた〜程おらる

初う稲うる比の句。世界と万里の邦ハ控ふる

情紙示せり。初うハの句獨也小也文何〜紙  
ま〜す境界〜〜明あり。

初うはるや登ハ程〜會ハ男うる

初也や〜られも又我友ある〜比

此二句獨也何り。初ハ其角が豪洒を戒め〜る  
〜。飯ハ洒也何〜。初也ハ中紀を示し。世俗  
嘗ハ其角。字の戸ハ我ハ夢冷嘗ハ嘗う初  
と解〜とぞ。後の句〜られもその比のひ〜。一  
旁ハちのちぬ動靜をむ〜り吟〜たるん。



素中が新務か

君火くけよき物見せん君丸け

一井亭

猿森より宿ハ師老の夕月夜

初句ハ君をよきもの程〜〜〜境界あり。  
後句ハ東海よ人海師老の日ふ。む〜  
月と露ふハ。初りのあき分れ均りのあり〜。境  
界と其ん〜〜あり

笠もちきかを志づる〜何〜

いう中へきき者や虎乃松本笠

こゝろか〜もあ〜てや君れ枯尾か

初句私をぬ天道と六初を〜。程〜〜姫む  
〜り俳諧〜。笠もちきハ境界〜。次ハ松本笠  
と風流物〜。こゝろ杜甫李白うたふ〜  
〜。風流と賣ゆ〜。法師よと世の識りを  
省〜。後句を〜書ふ之秋を短て唐不帰  
〜とゆ〜。こゝろか〜もの穢は雲あり境界を深  
君れ枯尾花ハ跡生の甲斐あきを喩せり。



深川八賢

米買小賣の代家やうけ改中  
これ賣らうへの白なり。帛一ツのぬ境界を  
諭せり。

年の市線美買年かをやな  
多れ市ハ運去といふるむ世の徳ひあらうら。  
仏一ツ小信ふる身の美を放中あらうを諭せ  
るあり。

月とぬさるうらじ年の書

盗人小盗く新のゆり多の書

初めのまハ身不灰うある風流を構くこれた。  
愛の心あかこの横岡。賓客と禮き新く。お  
としも果しうらとなり。決り夫の人と生育  
とらや。口ゆるうあら必食をせ。肩ゆるうあら  
かあらは悪ゆるののや。料店の新しき  
とら人あかあられくる新のゆれど。又かあら  
ぬ多をぬよとなり。此二の境界親おの身一  
あり







獨をきくせしむるあり

清き流るる柳ハ芦井の里子  
 ありく田の畔は流るる此水の郡  
 中戸部系の此柳ハ世をわ  
 ちどおろふの終ひすまを  
 いづく終るやと思ひしをうふ  
 此柳の陰はまよふをうれを  
 田一枚うゑたりたちさる柳ハれ  
 青柳の泥はまよふをうれを

道のく柳のまの西上く山系集にあらたか  
 ばか何れも海も何れも山系集にあらたか  
 も端書何れもいふりしと前平に思はせし  
 にそは何れもくの花やおの泉何れも物の  
 ことよ何れもく形をいふに  
 一かよれを一村の柳と連れ何れも  
 昌周の詩何れもく山系集の歌を  
 圖よまよふとありけ何れもく相似るる風景を  
 ちれいかく各何れもくされいふの  
 の句を思ひまよふとありけ何れもく田系  
 のなまよふとありけ何れもく田系



秋風うき瀧の庵をるぬ

梅ふしきりのふやお誘と盗まはせし

これ仙よりくつるほどと林和靖お探し。庵れ  
清雅なるを諭せらる。白梅は実ありお誘は  
中うけゆし。その実ありお誘又隠しと盗  
まれしとせ。これ清純者の利はあり。

初をきし所は年を越して

これ人う蔬菜くわすは花の香

これ自色の匂なるべし。は匂斤量しとて雪は

曾子達磨と出合の事やよめる匂といふ説あれを楊  
書こそつとえはゆゑふ加の字を濁者あよみ桃書既院  
の身と遁退し。かるみやひなる中は蔬菜くたを  
我斗といひし。自色の匂といふし。お満と近世時人傳  
といふ書か。いふなる人もあはば伏見の桃ふしと乞食  
の如くわらむし。あまうかといひし。中にきみて稲荷  
羽倉氏ののりといふ書借りて見るとのみたあり。後  
名をいふは身傳のりて後心とさうやうなり。教士羽倉  
氏は來り其人の居るといひて生涯の教を謝し



あつとそこれを花を世に送物なればかゝる異人な  
て愉しむる白なるもあつた

菊の庵小麻あきくはくくきく

漢のうさか出さ

あやゆほのや白魚。あらしき一率一す

あれ腰の白く東は空わつふ白く成るるを海辺なれば  
白魚の一寸斗なるりて愉さう境界の初新書は白ふ  
あやまや新年。甄米六升お日一辨裁

閏正月朔日

をどす此の正月さるやあまのり

壬正あまのり白なる。をどす此の源氏の冊子を  
くり返すよりくり返すこと正月あるを愉せ。  
これあまのりの巻の上中二冊あつたつたわひ  
よせり

遁世のし記

飛空し海をり友やアの生り

よつとくさしぐさい白の体あつる。格をとまて  
ぬる初のおくたうを笑しは。本誌をとるりの



も又拙り。ゆゑは本紙紙たるのちぬを考とする  
あり。

海道の陸奥のりて

弟拙中との飛入るものあり

去のちんと六かの益好う情どうのせと示  
せらるるん。

水口より廿年と経て友子

あまふ

いのちあつての中ふまゝなる様なり

けららわいむわあふらうなるは笑。あつてはむの  
はまゝなる世ぞとあり

友代のみさうといひらんは字紙

のむらうは白ひく

友代実をたふといはせん花の跡

おのち連と餅との糸牙を愉しあがらうせく  
は境界を合はるるり季節は甚なるべし

桑の已百亭は日次あり

舎りせん慕の杖ふなる日まぐ



麻の角まげ一ふ一の別せ

知良亭

杜若は日れふ殺むのけりひり

かきつをさかふるも旅のむしり

初句ハ杖はあふる日まぐよて亭名の百乃字

と諭せり。麻の角のむ。ちり書と信び人事

の別あふるりゆり。知良亭これ亭名ふを

なり。二河の玉ハツ橋あねをきつ旅あせり

在中のハ注あきつ。ちりきぬる旅と

ぞおりのよよみ流ひいふ。都をけりひり

殺むれおりのひ有のこころなり。次句のむちり

羈中とあせをられも注流の吐あふる

甲斐の山中

初句の麦あふるぐさむやと

注句麦ハ山物のこき旅。一初これ交り

厨あけを。字句の道色の麦を一口は

初もて諭せり。懸むかぬのむあると者り

格あり



落棉庵より

さみづれやる紙をけしる。啓れり

此の表も庵のまゝ其のわづらひをけしる。裏のまゝ  
のこ。紙をけしる。紙をけしる。裏のまゝ  
あり。此の庵も念じのわづらひをけしる。其のまゝ  
の百首も紙を思をせむ。一時の事。今ハ  
さみづれの落棉庵を寄しる。あり。

さみづれの人よ。たゞん。花も。文。書。也。

此の表も芥子なる事を。おをせしる。是も一体  
裁あり

尾澤亭を飾別紙

忘道すべし。中。心。を。ま。る。く

又裁む。さ。ま。の。中。心。を。ま。る。く。松。魚

初より。海。上。人。の。名。紙。紙。忘。れ。ま。る。く。中。心。ハ。紙  
交の。契。不。我。を。忘。れ。ま。る。く。命。あ。ら。ま。又。裁。ま。る。く。来。ま。る。く  
あり。次。の。内。心。の。中。心。ハ。又。裁。ん。の。う。け。ま。る。く。内。心



うらハ命のちりもく又かふる物紙書院まじり  
とをり也。

奇少接く海もく魚もる月もるのみ

月もるもる魚もるのみもる魚もるのみ

世もる白く梅もる一枝みそりくぬ

船のの小宿遠入やみそるもる

初月ハ根もる次もる古もる親月もる梅もるあむもるもる

まふもるひて味ひありや之梅もる一枝物もる裁入の梅もる

のみもるもるもるもる示のむもる海もる船もるあむもる船のむもる

骸骨の松の贅二句

稲妻や白の雲が藤の穂

以ちあづるや盆枕院の物をもる

南力れ贅

裸身も押合ふりのや月と風

後も贅ハ不敷をりもく論もこれ常あり。け

と白体もゆりもくもるべ

鼠音の画

朝う海も下もこれかこもるゆりれ



画好の賛

秋の秋をどうしつゝあふあふする法一也

画賛

一 露もあぢとぬ露のうらみ

賛より賞するがりとあそ。極むる物あり。たす  
くものあり。秋の句秋相おの意ををさ  
さそとくし重くよきと賞しつゝ次の画好はうの  
法一が辞み。むい露の月ハ暖のきとつんる物  
うわしゆふよりく。そくと極めたるなり。露の

白ハ画あるゆゑにほこぬとく辞りくたせけ  
くつあり

虫とつゝ題り

蛸何と書紙何となく秋の風

虫ハ極れる種あふ影を探しそ題と極せうふ。  
故と事とする俳諧の二風なれば。蛸とも虫  
とん極めたるハ俳者の一奇特とみあべ。清  
人の虎と大虫と書しも我必れ万葉歌よ  
ゆらる。されが風流のたよハかたるたぐひゆら



何ぞ撰をん

車庸亭

秋の萩と打崩し〜る新うな

車庸の熟字未詳。おりのふは庸ハある〜  
すゝらち中庸あれを。うのあ端を叩く中と見  
ちふとゆるを控より〜のきこを考〜

東明傳をん東明ハ根氏と〜更  
科の月の句を歌えんと〜してち茶  
妙典の巻小隠るあかりし時

松と産と〜

八月の松ち机の田陽の那

八月と〜机の田陽と田天よりけむり〜  
あうりきと示せり

武藏守春時仁毫と先〜

改詠去歎

名海のゆらやみ十一ヶ條

おも〜と名月の萩や茶回山

初ハみ十ヶ条のや。後のやハ茶回山のやなり



林の日のあけをきくぬ松のそと

旅行

あけのつと日あつてはあけも林の風  
さうらつたに林や聖寺のつ鐘  
まの響や聖小僧の後の色  
箱籠る起をさき世の秋をんき

初ハ林をたれ向なり。さうらハ松いつ進なくを色  
なごう。林風の倦きまはりぬとあり。旅行  
初めのさうらハ日の色ハあけさうらあり。あごう。え。旅

ゆくゆくはちや秋風を知りてあり。はさき  
てふ穢ちをさし用ふるも色くぬ松乃ぶと  
まじし。しとく情むぬさし。さきのわお照  
く起。聖寺のわれあけは此鐘の音を  
や。さうらでん老が旅路ハ世帯とあぶりの法を  
とあり。終のわの聖小僧ハ今の世ハ珠数高ハ只  
さうらあり。これむう。まのわあさうと人  
善哉とま。先てあけをめぐり。珠数高ハ只  
さうらあり。さうら。箱が時代は然るらん。わの



空ハ初書の消安きとらんく色とのいゝめら  
り色即是空と観くゝるあるべし。とちめ乃  
白ハ小法と遊方の留小乞食の蔬菜とくま  
疾くると見くこれ冷らうとぞ。くらハおのゝ  
世へ帰る曉の夢とよめる観のかりひよせある  
べし。さればなを抱く経歴する業いゝるわれ  
と見んとふし我。

予里の籠を之の種をけりまじ

世さうしとんやゆはるむ方なる

世さうしハ名を歎の死骨と。かゝる観おハ箱が性  
のむくともあり。

芝柏をす

林ありき隣り何とまらる人ぞ  
られ林色のりをや電すべきあり。家ハ杖とら  
んく籠くゝるとぞ。あうく栖<sup>すま</sup>る隣人くけく。  
まゝく問くゝるむし

桑名の本道ちりく

冬牡丹ふをく浦の如くきん



霜の後梅子咲る火桶う那

これ冬がらんのもて。冬を天の答を謝しつゝ  
あらん。郭公ハおらんのもけあり。火桶の白古  
世に思ふと楊去ゆり。これいふある夜々あらん  
折りふ火桶ハ冬に梅物あれた。火のぬたる紙  
おとを去つゝる紙を去らん。これを冬がらんも  
りと天を去らん。のりくきく冬がらんも。冬  
火をりつゝる火鉢の夏を去る。さうくあらん。

尾張栗川より宮へげぬ山紙

以料理可給

三十里尾張大根の瀬の那

冬一けハ地名。栗川ハ氏あるべし。世を去る書  
さうくあらん。おりの所あり。冬紙を去る。冬  
おを去る。冬を去る。冬を去る。冬を去る。冬  
東海尾張あつる所凡三十里あるを。冬紙  
東のとき冬紙の紙を去る。冬を去る。冬を去る  
かうくひつゝ時の冬を去らん。大根ハ紙を去る。冬  
と以。故ハ三十里とかけ也。



伊と云り書落しつり土大根  
此の書落しと云りくを込らるるを論せり  
あり

大聖持の金目守おやどろ

庭掃くゆらや青りちる柳

佛言拂地有五勝利あるとの言はよれるるるべし

後人をとんく

るをくあづむる言の初うけ

新根こけ人もあべしつるの言

初句書連のからゆきふ堪ぬ後人の言り  
たまけられたるをわたりし其言をくわられむ  
となり。実い人を何をれむを例のまじりなり  
せしむ。此のわもんかろくこのわい深川の言  
あどあをて飛越るなりん。

師克の海見んと松くゆき

海堂く鴨の生々布のうふふ

られその海のわたり。海堂をほのうふふ  
鴨の生々く鴨のわくとあふべし。一併裁く



あぐりまのやあぐりまの十年  
 橋まんや茶と風の林もあぐりま  
 られらの林集中みまぐり。くは林み作り  
 のまなり。や橋の程みまぐり。ゆらみまぐり  
 必くくあぐりまぐり。は初め「林」やあぐり  
 一十年やあぐりまぐり。茶のむのや「あぐり」  
 茶を風の今ど林と作らば。まみ流る。ゆら  
 り求めくかく作りくく。林の字のま林或は  
 存忘之秋あるの秋あり。

椹やあぐりまの世控酒

これ葉のをせまぐり人と刺するようあぐり。  
 うの殺る湯のたぐひあぐり。まぐり椹くわいよう  
 っくくあぐりまぐり。こればようまぐり酒とあぐり  
 りとあぐりまぐりもまぐり。椹まぐりくくあぐり  
 あぐりまぐり。

森は松川に星宵月を秋

ゆきかぐは星宵のあぐり  
 星橋の園は星宵のあぐり



此揚古並ちあり。若の傳る日。星傳ハ園の秋  
 とゆふべき也。すぐに教むはけしむる也。こら  
 ち一書の一休あり。句言ハおろ細園秋の星  
 とせし。揚古のさへハ一松傳り。幾ふりぬく。秋  
 傳ハ振むり如しとゆふ。は振りて。揚古のり。葉  
 名初しと。今此傳士そのり。とゆひ。定むるも  
 時人なり。

○名所の部

若野のり

花さつり。ハハ比の形なり。

此の字俗傳の扱ひ。さつり。平生の扱なり。  
 雅云。よふ比の扱なり。さつり。ハ若野ハ常  
 不辨増減あり。名は。い。せんや。今花の生。並  
 ち。なれ。とあり。若古のり。つ。ひ。り。つ。の。書。と。さ  
 こ。句。あり。ふ。と。さ。つ。り。一。章。中。若。野。の。字。あり。

若野のり

まじ。咲。う。ぬ。む。の。り。う。や。若。野。の。り。

此本。若。野。來。守。師。たる。り。を。論。む。る。あり。



大日枝やしと引控し一書

これ世にしり空海師の書にたをむれ書乃  
しつるあふねるあふべし。されば一書はか  
まじつこれ物な。撰者ふらあべし

まはるの浦利くふは浦人

のつとをうや

浦利くも祝儀作は和歌の浦  
貝寄する風のもあや和歌の浦  
乃書ふ和歌の浦もて返付し

初めのめ文字浦利かものをを以てし。し。  
才二の貝合のつりひよせま。いづれもらうあけ。  
才二の揚表のこあま。れをとり。和歌乃浦  
の絶系なるを諭せる。句の表は表れ別れ  
ををし。と慕。漸く和歌の浦もて返付し。  
と相。と。と。裏のふ。表れ別。風機を共ひ。これ  
ど。今此浦は来く。名れを。と。ある。と。表。も  
換。く。南。ふ。と。和歌の浦を考。し。と。る。句。あり。  
此例も。と。及。の。人。不。二。の。句。ふ。と。ふ。と。あ。て。二。月



七の八のうゝの世のむも不二と賞しつゝるむと。表ハ  
 二月の七の八の世の深あるは。かどは。深く推し  
 とさうせ。裏のうゝるハ二月中以いと。水き日と七  
 八のうゝまゝ。漸く不二の標と毎うゝるゝる世  
 なり。あどは。大飛が序なれを。種く人裏の表  
 の七の八のうゝを海り。扱も大いゝるゝる合点  
 まゝと。これゝの甄がするゝるは。佛語の名義まで。  
 佛士の御いゝるを極く。これゝのむかの幻術  
 のゝ賞するゝるも。さも有る人。蕉の御一ツの名義

歳方うゝと。世のうゝ海むも。世のうゝ人かゝの  
 芽若あゝるをん。又。おがふど。のむも。表をくゝの  
 佛いゝるゝるを。今。集。ふん。る。此。僅。ふ。七。の。む。を。う。む  
 の。只。一。む。あ。る。を。う。へ。一。学。あ。其。其。祿。や。う。は。を。ん  
 ぐ。推。ぐ。

いせりゝゝ

神地や思ひのうけも涅槃像

句言のむなり。神地いつゝいあれと。優那世紀よ  
 佛法の息を屏くと。あゝるゝる。世大廣のの吟



と定めしむるあはれ

英流の金猿橋

猿橋や晴と居坐る笠のこ

此の晴り猿よりみ合せ居坐るうそ橋乃  
危きを諭しし。

春風や一在りうつるこ笠のこ

かゝる名義の地より雨を病むと知しし  
うそ橋より死句とあるもの多し

羽黒山中

あゝとや音を羨ししと有る

羽黒根

夏れ月むのみ物なり飯徳山

席しとやわのこ月羽黒山

雲の翠嶽つ影出く月の山

初句は南谷の句より季前八交なり。風紙巻  
らんとすむら。雪と他りしる一体裁の中  
の句この山のお神未詳。徳邦の門しある  
字笑。清堂保食神ありともある人。句は



むせおのり小俄歎死し〜〜靈となるにふれるな  
 るべし。夏の月ハ月次ツキツキの月〜〜〜病むをよの  
 多き時よあひ寄るるな〜〜ん。才ハ女の態にて  
 山の名残いひあさぐり。滝の匂ハ空れ切遊るよ  
 山の名をえお〜〜〜るなり。

白川の歌

早苗あも我を恙死日教うる  
 これ早苗のまゝとよふ我後わがあとの白敷しろぬきと歎〜。

園のぞは枯れそあ〜白川の宮みやとよめる能因のねいん院いん

べるあり

麦刈り〜稲舟いなふねとせ〜宮と川

さみかれと集め〜とやし宮と川

涼〜とやむ〜のりがみ川

初めハ只お秋と〜〜〜ん。此二句ハ陸奥一

林の中ハ元よよある白た〜〜ん。此二句ハ陸奥一

必と只一筋〜〜〜大河あるは〜〜〜

け〜〜〜甲斐の落とや田子たごれ浦

浦とハま〜〜川あのみとさす〜は浦と〜川の



おちりしき急流なるを諭ししり  
 さらさらの雲吹落せ大江<sup>丹</sup>川  
 する士もあしりし月の大<sup>丹</sup>河川  
 初め端にお流ありし時田の宿り逗留と  
 あり。ゆゑにうねりも吹落せしりありし。大  
 河なるを諭せり。次もあしりし後りありしを  
 ぬふ。さ月の今よりけし誠しりし。大河なる  
 う紙諭せり。

さらさらの中しりし

いのちありしものつふは是れ中流  
 本流の雅をを殺しし。信終お流すをゆい  
 の御ありし。此いのち六耳心のさらあり

誠の中し

中山や誠海も月も又命  
 これ誠海再行の吟なるを。此いのち雅を  
 かり

雪白し。いさふと保の冬なれや  
 此と保は松しを指さるるを。測りしありて



よハ松の渾濁水ハ混〜〜見ヨ〜〜様を。今我  
見時と秀もふけ〜。松の字どり〜〜  
例の俳諧〜。

或菘畑や一寸わくの麻のちり

麻ハ毛物中れ虫声なる〜〜句意ゆかり

菊根の園戯〜

目よりかゝる時や落文は月不二

けものあ〜。〜〜これのや〜〜  
あ〜〜なる〜〜却〜〜

なり不二ハ〜〜名実を〜  
そたなる。

園戯る日ハ〜〜山みち

雪ハ隠れ〜

雪時ハ不二と見ぬ日ぞ面白

〜〜隠〜〜  
中ハ絶〜〜

寛翁ハ〜〜蓬萊方丈ハ神仙



の地なり。眼のゆへり士界なり地  
 を抜く蒼天とてこく日月の乃ち  
 雲つとてあつて向の雲みや  
 雲よりあつて雲千變と。詩  
 人の句を極さぞ。女士文人も云  
 紫とてあつて画工も筆を控てき。  
 糸彼姑射の山乃神人ありて。さあ  
 を乃せむ。その後とよくせん。  
 雲、雲れあつてく百景と考り

あつてくくくくくくくくくくくくくくくく  
 宛小なり。百景、大山なり。くくくくくくくく  
 くとんとをえざれも。はむ小隙くくくくくく  
 くとく。只とくくくくくくくくくく。むくくく  
 くとく

石二乃すくくくくくくくくくくくくくくく  
 くれむくくくくくくくくくくくくくくく  
 矣。雅志の霞なれを他の名家もくくくくくく  
 人々も雲一字なれむくくくくくくくくく



月消く林を入日の影の不二  
 凡不二の癖はを分みるごとく他をこれ常あり。  
 契沖のてふれはふよ「あはつちなれ節のうらある  
 名玉ハ不二の音根の音ありそ有るる」とあり。昔  
 月のころりハ月なきえ日入く故ハ天地間ハ物也。  
 只沈く切つる秋天の不二のことなり。其角ハ  
 月の白ハ不二ハ入日と云々癖やうかの月」  
 不二の音根ハ加られぬやなり也  
 これ<sup>春</sup>の白ハ。棲ハを種海乃ありうく又あり。

押は街道をさるる人百人ハ百人なりんぞ不二と  
 りくゆをぶ。これハ月のころりハ或ハ里ありとあり  
 され或ハ棲の林ハまづは。あふ十安ハ隠人  
 へ。あづらもたす目録書うんとあり  
 雲ありの空ハ芙蓉ハ天れ也  
 芙蓉ハ蓮うく不二ハの美名あり。白を空  
 雲ハ湖ハ山の守殿うく。雲ハ大空ハ好け也。  
 伊方のハこれ歎ひありと云々也。  
 一尾雲ハ時ありの雲ハ不二の音

照つての空ハ芙蓉ハ  
 依る空ハ芙蓉ハ  
 押ハ芙蓉ハ花の白ハ



侍言一冊抄  
百四  
はむ宮ハ宮等より幾子條々尾を曳きしり  
山なれた。一方ハ八時多分迄催し。一方ハ宮あり。  
一山南ハ西物ありととりて大形紙繪せし。この  
阿房宮ハ大殿ありと繪さんとして。一宮之間而  
是候不齊と他はさるふあり。

松島也やあゝ小碎く夏の海  
まのしゆや甚と衣装よ月とあ  
松島也やあゝ紙衣装に夏の月  
まのしゆや宮れあ代のきぬくまう

九世の教宗人佳境ふ或く枕するや。十日廿日  
或ハ二月廿月。佳句無くて過ぎ。時をかくて又  
至也。佳句あつたを止む。又始々ひ或くさるハ  
魚を以て登紙捨るのいそれ。海ハ松島也の  
ありといふ説ハいふぞや。捨るの箱紙里かな  
らハ繕廣物ならん。さて箱の東行ハ代地まで  
と見え。

松島也や笑ふくくくく  
振るうやさひさふかろい



と加くそく地勢魂をちかまひん

よ似たり

象潟の雨や西絶り横の巻

この句象潟と西絶り。雨と眠を對せり。一本に象潟や雨はと出るなり。西絶り眠をもとせしる。象潟は雨ゆるう故なり。然るに雨も眠も西絶りのうこふりこせあを。象潟は晴色一方となるるを。象潟の景は。且奥の細道の文も此時況は雨あり。まゝと東坡の西

湖の待をうりせる句と見んも。西湖雨亦奇西絶淡濃粧とみくも。そのともわく是は書れ語をい。只西絶を以て象潟を喻しとる紙紙ん方のと。

いごうひもまごて文科の郡う形

この句八月の名あや一とそ。西絶文は百里の道遠をこひ。中秋の天を戴てふなり。八月紙とすする句あり。は句はもの字は合ふとるならん。文科は不老の養うくりつとも秀也と。



言書は確井とこゆる

行ふよごとく春をて見あぐぬ本芽印

これ春玉の山あつを諭せる

西へくつふはむ後思ふ春玉も  
出づ管見の物やまゝに春玉  
ゆれをまゝに春玉も海の方へ

吹花も石の浅間の雪をわりの如

これ浅間のやけの山あつを諭せる。柿の石

確斗なるも種くく小児もらぬを以。白とハ

風の浅る春と山の春よりけたる。

林風や藪も白を不破 園

朝むつや月見此旅の明をあれ

玉くやハ春さふ不破の月

あゝ

石山の石より春一林の風

初も不破の園ハ本旅の序とすもの。次朝

むつハ誠春の浅生津さくの春とそ。杉後

あゝ。白を春といつ春さくもの明あり。春と

此氣比ハ消あり。春とこの白加春の那言と。

之井と此風春消さく。春と春を春の春と。

これ隠せぬりのや春田の橋



名月の婦の行有るの湊田の橋

初句拍子のやの字よみよみよわやとあれば  
六月名のやと。今や字と橋の味つけささるる  
の海くさるるを詠く橋の字久なるを諭せる  
なり。次も名前のやとく。壬辰秋のやれ。湊田  
橋橋なれを志するらん。句中拍子れ置るるは  
けし。

六月やとくひりきりわく嵐山

切成名遂而退

山の名をゆきと敷とくを橋なれ

初句六月なれをくそ次拂をばと嵐を添  
くさる。次の名くさるるに橋名よ有るくはるる  
はなり

八瀬のきり

寛政名や梅も橋もあふ草

これ秋の名なり。やせハ菊の産地なり  
清瀬の浪平流りや友の月  
清流にや流く散るるを松葉



初白波の月を流るゝたのちちられを場の白と  
まづきとなり。後の白と流るゝの樹の赤を  
流るゝすゞぐゝを。今赤紫の氣をまゝせ。  
及しゝゝ赤紫をまゝせゝゝ一併裁し

枯立ッや伊弉の山は松中

伊弉ハ生駒也。枯るゝゝゝ生るゝをまゝせゝゝ  
ゝゝ。これもあふおゝゝ一併裁なり

八朔や天の橋立たをぬれ

この化系あ方より松系也合ハ中ハ切ノ夜の

文殊堂ゝゝ。守む所殆んどたをぬれゝゝの  
也。ハ朔ゝゝゝを呼也。前ハ此將  
持手ノ堂をまゝせたり。

葛城ゝゝ

ちの所見ゝゝ花はゆめゆめ神の鳥

られ神ハ一をまゝせゝゝ。さて名をぬれ  
まゝせゝゝ。大体流るゝゝのまゝせゝゝ  
只を傷とまゝせゝゝの他は去兼んも。白と流  
移るゝは益るゝハ省きぬ。されハ秋の名所を撰



集は悔くおのづかきうわりのまふかひは志  
うし涙

あの日や世間紅粉を塚町

これ東武戯場の代。そきうくるりや古く  
人の初るもまこ廣く。元海内是不准する  
の。洛の待原。大坂の川演。名をりく通する  
おのひを束るうあはしゆら。あどく雑物の敷あは  
さうん。ちりくああれくを扱ひ補くうし涙を。  
中しくを初きあもわりの人

十六日の空をこれこれに満す

れ小貝拾去んとく種のはは

舟を走らひ海に七雲

さひーさや流すあうちる演の秋

これ流すを満き位よまそく諭せると

秋や流すは流や秋くまそく

月をあれと留まれゆくはすの夜

月をそものたまそくはすの秋

ひくくくまそくはすの秋あそく



又後せを誂むれば名通は比平の林

初めの名は時前此林もきや秋は比平の如く。  
色は地さうの淋もきや比平の林のごとく。今  
麦の林ごふかく淋もきや。満るるの林の淋も  
さ思ひしるさなり。流は甚八月の深もきを誂ふ  
時あり。あづきもきとそれと無きも人なり  
と。こむり六稜もきとやかこれなり。曰むり六稜  
の吟もき。びざらるる去地の流もきと名をせ。  
宿りもきとを誂ふけたり。初く葉もきして

後。終る果のむらりつるあらん。此句もつづく  
一葉終あり。比平一羽御人來りて世との風流  
と誂むるうら。名前の俳士も時ありと句れ出  
ぬもあなり。葉別の名は併もきと十葉中の中  
秋の月も比平の。名席の二三人句を誂て懐案  
は載也。執筆宗近の句を誂る。名月やと  
誂る。誂といふは。かゝるうら化より出る七句誂  
載る。執筆又誂る。宗近も名月やと誂て  
又止む。一巡もみり通ども宗近、いさご御句



ありき友又懐く。宗近「名月やとほろり。之夜  
 合せく「名月や」「名月や」「名月や」となり。  
 行脚中かゝる事もゆきとわくる。比行脚加  
 の白「宗近のあうく「ある白なる」とあうざる  
 をわきもき。世句「名月や」と歎く。さうさく  
 之夜の月たふる物なく。清めなるゆい  
 種人の後「みそを」とねを今「江戸の白も。い  
 と淋しく飛ぶべきよ。江戸の淋しく「世へ乃  
 首く「知る事なれた。そのゆい「文不子強つ

けぬく。さびく「六十かむうあは存く。さう。  
 体裁ハ如世格うあきもこる格はをあらう。ゆい。  
 これを世格て「物箱の世へ人のむは傳をを  
 つらん。さびくもいさ如く。さふ取く「さぶべき  
 体あきあまや。いつく「あまのあう。かの行  
 脚人の如く却く化の格あるをいぶらり。かの道  
 と正風ありといふ。これ常を羽織の下「志なるら  
 くと向うく。世羽織く。といふも。そ名義  
 みたうく。さうく人羽織たをさうゆいあ毎せざるが



如く。世の穢者いふごとく佛僧の正義を知らず  
 んや。且爾が自を稱ふ能くも。尤きを以て方  
 義を蓋ふが如くあれど。多は其を中を以て失ふ  
 べし。徒云とあり。又おのれが他を稱するも。乃  
 同を以てその毎は惑わりのあるん。されば徒然の  
 爲に能く格を立つるの爲のこあるは。世  
 と平うたうんを能く有るなり。今格を以て  
 持て他を以て格を以て理を以ては。如くは。と  
 別々の格を以て格を以ては。是れを以て。是れを

諭と云ふ義を以て人の公を以て安く。自を以て  
 尚吾に能くも人不能く決するの惑を以て  
 べし。これを格を以て徳を以て。古人の自は。燃る  
 火は灰打を以て。志は火の貪嗔癡之毒の  
 熾火なり。自は燃るるの熾火の切滅は。燃る火を  
 灰を以てけり。消火が如く。燃る火を以てけり。の  
 うの燃るるべきは。自は燃るる。備は火を以てけり。さ  
 て志は燃るるべきは。自は燃るる。燃るるは。格を  
 以て燃るる。燃るるは。自は燃るる。燃るるは。格を



形てのほもなる事、小勝く、を我あう。六七  
 六の辨り、いひ違ふる、子能をさる、りの何ふ。バ  
 故事、古後の傍を法中、人。或は害を以て、喻を  
 べき。哲く、を傍をいもん。むう、唐去れ、莊  
 子といふ、人物化の理を、人小曉さんとする。おた  
 ち小解き、曉すべき、手辰なく、胡蝶の夢、りそ  
 喻せるとそ。今その物化の理を、たとへん。ある墨に  
 利富といふ者あり。一日所用、何事して、隣里へ、行る  
 が。道のか、さうなる、丘よ。老人二人、ゆと、かあ、けは

泣き、る。利富、立、あ、り、こ、子細を、恨、い、は、く  
 され、く、いと、か、あ、り、き、事、あり。今、齡、す、く、に、六十  
 あり、こ、り。人生、か、さ、り、何、道、を、極、く、死、去、ん、の、必、定  
 なり。それを、別、深、ふ、此、は、世界、を、去、り。又、子、別  
 深、あ、り、何、の、世界、へ、ゆ、く、り、よ、と、あ、る、を、以、て、こ  
 かり、と、さ、く。又、さ、あ、く、な、く。利、富、が、必、ま、く、あ、ら  
 家、行、り、小、而、と、大、小、異、つ、り。君、逢、は、今、死、し、て、別、深  
 あり、き、世界、へ、ゆ、く、と、す、る、う。我、ら、別、深、あ、り、こ、り、  
 何、の、世界、を、去、り、と。今、世、別、深、あ、り、き、世界、へ、来、り、何、む



とてありあり。二人のちを推しおのる世界の表  
 裏とす。此世界を裡ありとする。此世界を表  
 裏とす。此世界の裡あり。初の如く互にうら表  
 と表ありやる。利富をどりやうたりありや  
 ありきん。此二人は別ありとて。さて視ていき。戦后  
 中一ハ後と共に。今ハ戦后の風もいかにうら表れ  
 也。二人の志人はくどくこれをさう。忽ち物化乃裡  
 とさう。後を拂ひての如く。此風ハもと  
 戦前の玉と玉に里れ推し。初風がうら表れ

とて此初風をどり。戦後の玉新風の浦あり  
 也。金盤の推し。ゆゑあり。玉と玉の  
 ちを。これを別達の推し。別達を  
 み。七日の白を夜とさう。初風を  
 推し。この別達は。目もくれんもさう。あ  
 り。あなをけられ。玉と玉の。み  
 うら表れ。やる。な。又  
 此里ハ別達の推し。初風をさう。これをさう



何言一語  
重三  
のの八日〜あり〜。道は〜の八日〜。親〜も  
これ人情の常あれを。い〜〜。誠后の事を  
もそれ果〜。かの祝を〜〜。物皆形  
也〜。若〜あり〜。道は〜。不化〜。捨〜  
のを〜。それれか〜。た〜。不〜。物化  
〜。あり〜。莊子世道理を〜。曉さん〜。我  
夢〜。小蝶とあり〜。花は〜。其所の公蝶の〜  
あり〜。それれ〜。莊子あり〜。事〜。不〜。〜  
〜。〜。これ公蝶を〜。かの物化の理は

曉せるハすあるをち俳諧なれた。翁も物化は  
諭さん〜  
あり〜。此俳諧〜。翁〜。〜。

俳諧一串抄 終

非皆一串少

四三



一車抄公之  
所神田杉町  
丁也也新道一桐軒



